

ドイツ語における“bringen”を用いた 機能動詞構文について

野 上 さなみ

1. はじめに

ドイツ語には、kommen, stehen, geraten, stellenなどの動詞と前置詞句を組み合わせで出来る「機能動詞構文」がある。前置詞句内の名詞には動詞から派生したものが数多くある。本稿では本来「持ってくる・持参する」といった意味で用いられる動詞 bringen を機能動詞とする構造のみを対象とする。まずセクション2で、機能動詞構文の役割について過去の議論を簡単に紹介する。次にセクション3で、bringen が物理的移動を表現する際の「認知モデル」を示し、そのモデルが機能動詞構文のような抽象的表現に転用されるプロセスを述べる。本稿では意味論的な機能動詞構文の分析を行い、動詞 bringen を用いた構文が、Vendler(1967)の動詞の四分類で言う accomplishment を新たに生成するメカニズムとして位置づけられることを論ずる。

2. 機能動詞構文の位置づけ

bringen を用いた機能動詞構文の目的についての見解は、(A) Aktionsart(動作態様)の表現形式として (v. Polenz: 1963, Zifonum ほか: 1997, Eisenberg: 1999)、(B) 基本動詞に対する完了相 Aspekt(アスペクト)のペアとして (Leiss: 1992)、(C) 基本動詞を使役動詞化するためのメカニズムとして (Duden: 1998) 捉える、という3つの見解に分類することが出来る。(A)では、同一の基本動詞から派生する名詞句を含む前置詞句と、異なる機能動詞とを組み合わせでできる構文どうしを対照した場合に明確に現われる Aktionsart の相違に着目している:

(1) a. zur Entscheidung kommen/bringen/stehe

(決断に至る・決断する・決断の最中である)

b. in Bewegung kommen/bringen/bleiben

(動く・動かす・動いている)

(1) a, b では、機能動詞が kommen, bringen, stehen/bleiben と交替するのに応じて構文全体の Aktionsart が始動相、使役相、継続相と変化する。

これに対して(B)では、bringen を用いた機能動詞構文が、「既に完了相のアスペクト価

が中和されてしまっている(本来完了相であるはずの)前綴り動詞に対して、完了相アスペクトに相当する視点を提供する形式(Leiss:1992)」として捉えられている:

- (2) a. aufführen vs. zur Aufführung bringen (上演する)
b. abschließen vs. zum Abschluß bringen (完了する)

しかし、機能動詞構文の基本動詞は前綴り動詞に限定されるわけではない。sinken(沈む), fallen(落ちる, 倒れる), schweigen(黙っている), stehen(立っている)などの前綴りを伴わない単一の動詞や、Aktionsart が継続相であるような動詞も基本動詞として使用される。従って bringen を用いた機能動詞構文を、“前綴り動詞に対する完了相アスペクトの表現形式”として捉えるという主張には無理がある。

さらに(C)では、この機能動詞構文が、意味論的に自動詞に対応する、単一の使役動詞の代わりに、使役の意味を提供するとされる。つまり bringen を用いた機能動詞構文を、使役化のメカニズムとして捉えるという考え方である:

- (3) a. fallen (倒れる), fällen (倒す), zu Fall bringen (倒す)
b. sinken(沈む), senken (沈める), zum Sinken bringen (沈める)

しかし、基本動詞は自動詞に限られず、使役動詞であることも可能である。この場合には、単一の使役動詞と機能動詞構文は同義ではなく、機能動詞構文では全体の意味構造のうち、「結果に至るまでのプロセスの部分が強調される」という:

- (4) a. versteigern vs. zur Versteigerung bringen (競売にかける)
b. ausdrücken vs. zum Ausdruck bringen (表現する)

本稿では上記(C)の説に従い、機能動詞による使役化のメカニズムや、基本動詞と機能動詞構文の意味の相違に特に注目し、その相違がどのようにして生じるのかに焦点を絞って論を進める。

3. 認知モデルとその比喩的な転用

3.1 移動および抽象表現の動詞 bringen の認知モデル

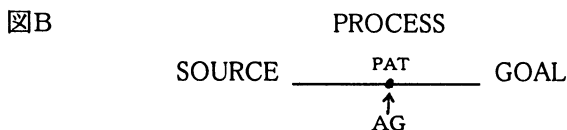
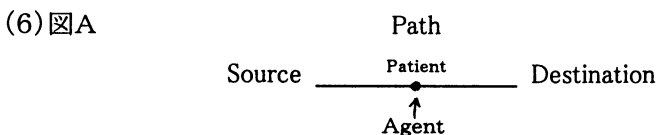
認知言語学では、言語表現の構築において、人間の肉体的・物理的な体験現象がまず図式モデル化され、その図式モデルがより抽象的な認知モデルへと移行される、というメカニズムが主張されている。このメカニズムは Lakoff(1988) によれば imaginative projection と呼ばれる。機能動詞構文においても、本来移動を表現する動詞 bringen の物理的な図式

モデルが、抽象的な領域の表現のために比喩的に転用されると考えることが出来る (Eisenberg:1999)。まず Lakoff(1988)の Image-Schema を参考に、(A)移動の動詞、さらに(B)抽象表現の動詞としての bringen の図式モデルを提案したい。(A), (B)それぞれの例文は以下のとおりである:

- (5) (A) Heinrich bringt den Koffer zu mir.
 (ハインリッヒはトランクを私のところに持ってくる。)
- (B) Heinrich bringt das Theaterstück zur Aufführung.
 (ハインリッヒは演劇作品を上演する。)

Lakoff(1998) によれば、物理的な体験における“動き”は Source(始点), Path(経路), Destination(終着点)を含む。bringen が叙述する動きには更に、動きの引き起こし手としての Agent(主体)と、動きを受けて移動するPatient(客体)という2つの項が参加することも考慮すべきであろう。前置詞 zu/in を用いることで、終着点の存在と輪郭がより明瞭に表示される。この5つの要素を含んだ、「物理的移動の動詞 bringen」の図式を(6)図Aのように仮定する。

この図式モデルに必ず含まれる出発点・経路・終着点の三者間の関係は、そのまま抽象表現のモデルへと転用される。Source は Initial State(第一段階)として、Path は「中間段階の連続」として、Destination は Final Stage(最終段階)として捉え直される。これにAgent およびPatientを加えて、抽象的変化の表現の図式モデルを(6)図Bのように仮定する。本稿では図Bの3つの段階を表す用語をそれぞれ SOURCE(前段階)・PROCESS(中間段階)・GOAL(結果) とし、AgentはAG、PatientはPATと略す:



移動の動詞のモデルでの Destination は“具体的な場所”を示すが、機能動詞構文での GOALは、動詞から派生した名詞によって表される“経過あるいは出来事”である。(7)では、AG が PAT を「黙った状態」あるいは「熱狂した状態」へと変化させる:

(7) a. Der Regisseur brachte den Kritiker zum Schweigen.

(監督は評論家を黙らせた。)

b. Der Musiker brachte die Zuhörer in Begeisterung.

(音楽家は聴衆を熱狂させた。)

物理的移動と抽象的表現の語彙概念構造上の共通点・相違点を(6) a, b で示す。二者の相違は、PATが受ける変化の種類であり、a.では位置・場所の移動であり b.では状態の変化である。共通点は、PROCESSが進行する際に必ずAG が PAT に変化をもたらすといういわゆる「引き起こしの概念(CAUSE)」が含み込まれていることである。

(6) a. AG CAUSE (PAT MOVE(DEST))

b. AG CAUSE (PAT BECOME(GOAL))

また、機能動詞構文内の前置詞によって、GOALの表現に微妙な相違があることが指摘されている。Persson(1975)によれば、zu を用いると、GOALへの「到達そのもの」は直接表現されるけれども、名詞が示すその後の経過や出来事、すなわち「GOALそのもの」は含意されるにとどまる。一方 in を用いると、GOALへの到達のみでなく、その後の経過・出来事も直接表現される。それゆえに前置詞が zu の場合には、GOALに到達するまでのPROCESS が特に強調され、in の場合には、表現の重点が PROCESS、到達、GOALの三者に均等に配分されると結論づけている。

3.2 動詞の名詞化とアスペクトの関係

Ehrich(1991:p.451)は、動詞を基本に名詞が作られる場合、その名詞化の種類に応じて、出来上がった名詞の担うアスペクト価が異なるということを指摘している。具体的には「不定詞がそのまま名詞化される場合」と、-ung などの「接尾辞を用いるなどして名詞を派生させる場合」の例が挙げられている：

(8) a. Das Reisen ohne Gepäck hat Spaß gemacht.

(荷物なしで旅することは楽しかった。)

b. Die Reise ohne Gepäck hat Spaß gemacht.

(荷物なしの旅行は楽しかった。)

同一の動詞から作られる名詞でも、(a)不定詞がそのまま名詞化される場合には、ある現象を imperfektiv(不完了相)すなわち時間的に“開いた”経過(Vorgang)として叙述し、(b)派生名詞の場合には、perfektiv(完了相)すなわち時間的に“閉じた”出来事(Ereignis)とし

て叙述する。(8) aでは、Reisen の最中の各段階は、“Reisen そのもの” と等質なものとして把握されるけれども、(8) bでは、Reise の最中の各段階は、あくまで “Reise の断片” であつて “Reise そのもの” と等質とはみなされない。この原則に従うと、前置詞句内の名詞のもとなる基本動詞の Aktionsartがどうであれ、不定詞の形での名詞化は不完了相化 (Imperfektivierung)、派生型の名詞化は完了相化 (Perfektivierung) の作用として捉えることができる。二つのタイプの名詞化の相違を(9)のように表示する:

(9) A 不定詞の名詞化

schweigen: [Schweigen]^{imp}

rollen: [Rollen]^{imp}

zergehen: [Zergehen]^{imp}

stehen: [Stehen]^{imp}

B 派生型の名詞化

abschließen: [Abschluß]^{pf}

erfahren: [Erfahrung]^{pf}

abstimmen: [Abstimmung]^{pf}

begeistern: [Begeisterung]^{pf}

4. 基本動詞の限界点と機能動詞構文

ではここで、機能動詞構文における、基本動詞のAktionsartと名詞化の種類の間関係を具体的に見てみることにする。基本動詞の Aktionsart を *telisch/atelisch* (動詞の語彙概念構造内の限界点の有/無) に分類する。基本動詞のAktionsart および 名詞化のアスペクト価を名詞の右肩にそれぞれ記入する:

(10) a. Der Bundestag brachte das Gesetz zur [Abstimmung.]^{TEL/Pf}

連邦議会はその法律を票決した。

b. Der Millionär brachte das Gemälde zur [Versteigerung.]^{TEL/Pf}

百万長者はその絵を競売にかけた。

c. Die wärmende Sonne brachte den Schnee zum [Zergehen.]^{TEL/Imp}

暖かい太陽は雪を溶かした。

d. Der Vorsitzende brachte die Verhandlung zum [Abschluß.]^{TEL/Pf}

議長はその話し合いを終わらせた。

e. Wir brachten seine Absicht in [Erfahrung.]^{TEL/Pf}

われわれは彼の意図を(聞いて)知った。

セクション3.1.で言及したように、(10) a-d のように前置詞 *zu* を用いると、基本動詞が叙述する現象は含意される(impliziert)にとどまるため、基本動詞が限界点を含むにしろ否にしろ、また、名詞のアスペクト価がどうであるにしろ、機能動詞構文全体の表現の重点は、これら前置詞句が叙述する GOALへ「到達するための PROCESS と到達そのもの」にあるということになる。そこで、基本動詞が *telisch*、すなわち語彙概念構造の中に限界点をふくむ

ときに、名詞化の種類によってこの限界点をめぐる解釈に違いがあるかどうかを検証することにする。(10)の基本動詞構文の語彙概念構造はセクション3.1.(6)で示したとおり(11)のようになる。ここでは名詞化される基本動詞が限界点を含むことを“RES”で明記する。これは GOAL が自身の内部に限界点を持ちそれに伴う結果状態(RES)を含むことを意味する:

(11) AG CAUSE (PAT BECOME(GOAL/RES))

(10) a,b,d,e のように、基本動詞が派生型の名詞化を受けている場合、基本動詞が叙述する現象はそのAktionsartとは無関係に総括的に把握される。これらの基本動詞は telisch なので、その語彙概念構造に存在する限界点も含めて名詞化されているはずである。(10)cのように不定詞が名詞化されている場合には、限界点の有無に関わらず、現象の“経過”がその内側から観察される形で名詞化されている。

ではこれらの機能動詞構文で、名詞に含まれる限界点が必ず到達されるのかどうかを確認する手段として、各例文が結果相の表現を必ず内含するかどうかを検査してみる。結果相構造 sein+過去分詞は、動詞(句)の語彙概念構造に含まれる“結果状態”を取り出す表現形式である。従ってこの表現が成立するためには、動詞(句)の表す出来事が限界点に到達し結果状態に至ることが必須条件である。(10)の各例文とそれに対応する結果相構造の例文の組み合わせを(10)a'-e'で示す:

- (10) a' Der Bundestag brachte das Gesetz zur Abstimmung.
—>Das Gesetz ist abgestimmt.(その法律は票決されている。)
- b' Der Millionär brachte das Gemälde zur Versteigerung.
—>Das Gemälde ist versteigert.(その絵は競売で買い手がついている。)
- c' Die wärmende Sonne brachte den Schnee zum Zergehen.
—>Der Schnee ist zergangen.(雪は溶けている。)
- d' Der Vorsitzende brachte die Verhandlung zum Abschluß.
—>Die Verhandlung ist abgeschlossen.(その話し合いは終わっている。)
- e' Wir brachten seine Absicht in Erfahrung.
—>*Seine Absicht ist erfahren.(彼の意図は知られている。)

(10)e'以外はすべて^註、最初の文が後の文の意味内容を内含(implizieren)しているので、機能動詞構文においては、名詞化の種類とは無関係に基本動詞の語彙概念構造に含まれる限界点が必ず達成されると言える。さらに、前置詞 zu を用いる場合に直接表現されるのは、GOALへの到達であって、GOALの内容そのものは内含されるだけであるが、この

GOALの語彙概念構造に含まれる限界点は必ず到達されるということが確認できる。この原則を、機能動詞構文の意味概念構造の面から(11)'のように示す:

- (11)' AG CAUSE (PAT BECOME (GOAL/RES))
—> PAT(BE(RES))

4. accomplishment を生成する機能動詞 bringen

このセクションでは、基本動詞の種類別に、機能動詞構文の果たす役割を明確にしていくことにする。基本動詞を「使役の概念を含む動詞」と「含まない動詞」に二分する。

4.1 基本動詞が使役の概念 CAUSEを含まない場合

(12)の各例文のように、基本動詞が自動詞であったり、他動詞であっても使役の概念を含まないタイプの機能動詞構文では、機能動詞 bringen によって使役すなわち AG から PAT への「引き起こし(CAUSE)」の概念が新たに付け加えられる:

- (12) a. Der Arzt **【bringt eine Blutung zum[Stehen.]】**^{CAUSE}
(医師は出血を止める。)
b. Er **【bringt den Plan ins[Rollen.]】**^{CAUSE}
(彼はその計画を始動させた。)
c. Wir **【brachten seine Absicht in[Erfahrung.]】**^{CAUSE}
(私たちは彼の意図を(聞いて)知った。)

基本動詞が自動詞である場合には、機能動詞を導入することによって“使役動詞化”が起こる。(12)c の基本動詞 erfahren は知覚動詞であり、参加する2項の間に存在するのは「引き起こし」の関係ではなくて、知覚者:EXPERIENCER(この場合主語)と刺激:STIMULUS(この場合目的語)の関係である。一方機能動詞構文になると、知覚が実現されるまでのPROCESSが強調されるわけであるから、たとえば情報を感知するに至るまでの、情報を収集する為の知覚者の努力であるとか意志といったものが意味の内部に取り込まれることになる。ゆえに、「偶然情報が飛び込んできた」という文脈では erfahren が、「知覚者が目的意識を持って情報を得た」という文脈では in Erfahrung bringen の方がよりふさわしい表現であると言えるであろう。こういった理由から(12)cの場合には、主語である wir と目的語である seine Absicht の間にAG-PATの関係が成立する。この関係は基本動詞 erfahren の語彙概念構造に含まれていなかったものである。基本動詞に使役の概念が含まれていない場合には、機能動詞 bringen が「使役動詞化」の役割を果たしていると言える。

4.2 基本動詞が使役の概念を含む場合

(13)の例ではいづれにおいても基本動詞自体がすでに使役の概念を含んでいるため、機能動詞によって新たにもたらされる使役の概念が重複する形になる。基本動詞と機能動詞構文双方に使役の概念が含まれることを、動詞と動詞句の右肩の“CAUSE”で示す：

- (13) a. Die Krankheit [verzweifelte]^{CAUSE} ihn.
a'. Die Krankheit [brachte ihn zur[Verzweiflung.]^{CAUSE}]^{CAUSE}
(病気は彼を絶望させた。)
b. Der Musiker [begeisterte]^{CAUSE} Zuhörer.
b'. Der Musiker [brachte Zuhörer in[Begeisterung.]^{CAUSE}]^{CAUSE}
(音楽家は聴衆を魅了した。)
c. Der Produzent [führte]^{CAUSE} das Theatertück auf.
c' Der Produzent [brachte das Theaterstück zur [Aufführung.]^{CAUSE}]^{CAUSE}
(そのプロデューサーは、その演劇作品を上演した。)

これらの例文では、名詞化された基本動詞と機能動詞構文の語彙概念構造は、(14)a,bに示すとおり同一のものである。さらに、機能動詞構文のGOALとなる名詞にCAUSEの概念が含まれていることを(14)cのように明示する：

- (14) a. 機能動詞構文の語彙概念構造：AG CAUSE (PAT BECOME [GOAL]^{NOM})
b. 名詞化された基本動詞の語彙概念構造：
[AG CAUSE (PAT BECOME (GOAL))]^{NOM}
c. AG CAUSE (PAT BECOME [GOAL/CAUSE]^{NOM})

基本動詞から機能動詞構文を作り出す過程では以下の3つの事実が確認される。①基本動詞を名詞化することで、あらためてGOALとして捉え直す。②認知モデルからも明らかなおとおり、本来移動表現の動詞である bringen を組み込むことで、わざわざCAUSEの概念をもう一度導入する。③最終的には基本動詞と同一の語彙概念構造を持った構文が完成する。しかし、基本動詞では、PROCESS、GOALといったモデルにおける各要素が単一の動詞の内部に語彙化されているのに対して、機能動詞構文では、これらの要素が機能動詞や前置詞句で個別に呈示されるために、GOALに到達するまでのPROCESSの部分が機能動詞 bringen によって強調されるという効果が生じる。

4.3 accomplishment 生成のメカニズムとしての機能動詞構文

Vendler(1967)は、動詞の意味が実現するために達成されるべき限界点があるか無いか、さらに限界点がある場合には、状態変化にプロセスが伴うか否かという2つの基準によって、動詞を“state, activity, accomplishment, achievement”に四分類している。

本稿で取り扱った bringen を用いた機能動詞構文は、限界点とそこに至るまでのプロセスの両方を含むので、この分類の accomplishment に相当する。この構文には、たとえ基本動詞自体が既に accomplishment であっても生成される例が数多くある。その場合には、基本動詞を名詞化することであらためてGOALとして捉え直して、新しい限界点として設定する。そこで、この機能動詞構文を「新しく accomplishment を生成するためのメカニズム」として考えることを提案したい。fallen, sinken といった自動詞に対して、使役の意味を含んだ他動詞 fällen, senken が既に存在するにも関わらず、zu Fall bringen, zum Sinken bringen といった機能動詞構文が作られるといった例から考えても、限界点に達するまでのプロセスをことさらに強調した表現を生成しようとする力が働いていると考えることができる。

この構文に限らず、他にも「プロセスを伴った限界点のある出来事」としての accomplishment の生成メカニズムとして考えられる構造がドイツ語にはある。自動詞や特に限界点を持たない他動詞(Vendler の分類における activity や state に相当)を基本動詞として生成される結果相構造はその良い一例である：

- | | |
|--|---------------------------|
| (15) a. Ich <u>lachte</u> mich <i>tot</i> . | (私は死ぬほど <u>笑</u> った。) |
| b. Ich <u>streichelte</u> die Katze <i>schläfrig</i> . | (私は猫を <u>な</u> でて眠たくさせた。) |
| c. Ich <u>tanzte</u> den Boden <i>kautt</i> . | (私は床が壊れるほど <u>踊</u> った。) |

下線部の動詞はすべて限界点を含まないものであるが、各文末に結果を表現する形容詞(斜体で表示)を用いることで達成すべき限界点が新たに設定され、「プロセスを伴った限界点を含む」動詞表現 accomplishment が実現される仕組みになっている。

こういった他の例も考慮に入れ、機能動詞構文が accomplishment 実現のためのメカニズムのひとつであると結論づける。

5. 結論

bringen を用いた機能動詞構文では、基本動詞を名詞化することで新しい限界点を設定し、telisch で(限界点のある)かつ引き起こしの概念(CAUSE)を含む動詞句を“新たに”生成することができる。この操作は、基本動詞のAktionsartおよび語彙概念構造とは無関係に、accomplishment を新たに作り出すメカニズムとして捉えることが可能である。

特定の動詞について結果相構造が認められるためには、動詞の参加項が担う主題役割が一定の条件を満たさなければならない。よって、この場合2つの文が同時に成立しえないのは、**erfahren**を基本動詞とする機能動詞構文が、限界点および結果状態への到達を内含しないからではなく、動詞**erfahren**自体が結果相構造を受け入れないためである。結果相構造の成立条件についてはNogami(2000)を参照。

参考文献

- Duden (1998): die Grammatik der deutschen Gegenwartssprache.
Wissenschaftlicher Rat der Dudenredaktion (Hrsg),
Mannheim/Leipzig/Wien/Zürich
- Ehrich, V.(1991): Nominalisierung. In: v.Stechow,A. & Wunderlich, D.(Hrsg): Semantik.
Ein internationales Handbuch der zeitgenössischen Forschung. Berlin/New York
- Eisenberg, P.(1999): Grundriss der deutschen Grammatik, Der Satz.
Stuttgart/Weimar
- Lakoff, G.(1988): Cognitive semantics, In: Eco,U./Santambrogio,M./Violi,P.(eds)
Meaning and mental representations, Bloomington/Indianapolis
- Leiss, E.(1992): Die Verbalkategorien des Deutschen, Berlin/New York
Ein Beitrag zur Theorie der sprachlichen Kategorisierung
- Nogami, S.(2000): Resultativkonstruktionen im Deutschen und Japanischen.
Frankfurt am Main
- Persson, I. (1975) : Das System der kausativen Funktionsvergefüge. Eine semantisch-
syntaktische Analyse einiger verwandter Konstruktionen
- v.Polenz, P.(1963): Funktionsverben im heutigen Deutsch.
Sprache in der rationalisierten Welt. Beiheft 5 zur Zeitschrift "Wirkendes
Wort" , Düsseldorf
- Vendler, Z.(1967): Verbs and Times. In: Vendler, Z. (ed.): Linguistics in Philosophy
New York
- Zifonun, G./Hoffmann, L./Strecker, B.(1997): Grammatik der deutschen Sprache
Berlin/New York